二葉館あれこれ Vol.11

創建百年の二葉御殿

川上貞奴と福沢桃介が暮らした東二葉町の「二葉御殿」は、槿木町の「文化のみち二葉館」へと形を変えて、令和2（2020）年に創建百年を迎えます。

二葉御殿の建設にあたり貞奴名義で購入された敷地は、中北伊助氏（中北薬品の創業家）の所有する東二葉町の土地を大正6年9月に入手し、大正8年11月に隣接区画を買い増して、当初は合わせて1965・63坪でした。その後も買い増しされたのか、大正14年の住宅地図によると約4400坪の大きな一街区になっています。

川上邸の着工は使用人宅を手始めに大正7年からはじまり、本宅「二葉御殿」と順次建築されたようです。

竣工時期についての詳細は不明ですが、大正9（1920）年9月17日付『名古屋新聞』の記事「名古屋二葉町の高台には貞奴の為めに大きな家が造られた。―中略― 今川上御殿には一人の料理人と二人の女中一人の書生の五人暮し」を有力な記述として、遅くともこの記事の書かれた頃にはすでに竣工していたと考えられています。（「旧川上貞奴邸復元工事報告書」より）

それからは、桃介の水力発電所建設事業推進の拠点、政財界の要人をもてなすサロンとして使われ、約5年後、事業が落ち着くとともに貞奴と桃介の名古屋の暮らしは終わり、しばらくは貞奴の養子家族の住まいとして使用されました。

昭和12年6月には敷地が9分割して売却され、創建当時の和館部分を残した二角は川崎舎恒三氏（後の大同製鋼㈱副社長）が取得しました。売却後は洋館部分が取り壊されたものの、その建材は和館部分の増改築に転用されたので、貴重なステンドグラスやソファなどが残りました。

そして時を経て㈱大同ライフサービスの保養施設「二葉荘」として近年まで使用され、平成12年に名古屋市に建物が寄贈されて平成17年に「文化のみち二葉館」として甦り今に至ります。

貞奴が二葉御殿を離れてから後の戦争時には、焼夷弾にあたりながらも少しの被害でおさまり、戦火に没することなく形を留めることができたのは幸いでした。

大正・昭和・平成・令和と4つの時代を、形を変えながら過ごしてきた二葉御殿、近代建築の語り部としてこの優美な館を末永く残していきたいです。

今年度、「貞奴のお琴」と「二葉御殿に設置されていた避雷針」を川上家よりご寄贈いただきました。開館15周年記念日「ふたばの日」にお披露目の予定です。展示室2にある衝立には当時の風景の中に、避雷針を掲げた「二葉御殿」が描かれています。

創建から百年、現在に残る当時の建物は和館部分のみですが、その柱や天井板、床板などが在りし日の貞奴と桃介の記憶を残しています。二人も触れたであろう柱に触れて百年前に思いをはせてみるのも良いものですよ。

避雷針の突針部

当時の二葉御殿

IRODORI いろどり

二葉館には常設展示以外にも貞奴や桃介に関する寄贈資料があります。今回は開館15周年記念企画で予定の展示品についてご紹介します。

貞奴からのお駄賃

犬山市の男性が、少年時代の昭和5年頃に貞奴からお駄賃としてもらった硬貨。

二葉御殿から居を移し、東京で暮らしていた貞奴は、年に数回、岐阜県・鵜沼に建てた別荘「萬松園」に滞在していました。その折々に、犬山焼の陶房へ絵付けに訪れていました。その焼きあがった茶碗を届けるのが当時奉公していた男性の役目で、いつも客間に通され、「ご苦労さま」とお駄賃を渡されたそうです。

もらったお駄賃は合わせて50銭硬貨4枚、20銭硬貨2枚、10銭硬貨1枚。当時はハヤシライスなどの洋食が15銭、コーヒーが5銭の時代でしたので、お駄賃としてはかなりの高額でしたが、男性は「使わずにしまっておこうと心に決めた」そうです。

貞奴手編みの靴下

桃介の為に編んだもの。貞奴は日頃から何もしないでいるのを嫌っていて、晩酌の間や旅行中の汽車の中でも人と話をしながら手は編針を動かしていた程でした。

桃介が履いていた靴下は、いつも貞奴の手編みだったそうで、桃介を大切に思う気持ちが伝わってきます。また、細かく丁寧に編まれている様子から、貞奴の手先の器用さも窺えます。

文化のみち ぶらりさんぽみち ⑪番外編

賤母発電所と對鶴橋

今回は運転開始からは百年の節目を迎えた「賤母発電所」と、発電所建設の際に架けられた「對鶴橋」についてご紹介します。

福沢桃介が木曽川水系で手掛けた7か所の発電所の中で、最初に手掛けたのが賤母発電所です。木曽電気製鉄によって大正8年に長野県山口村（現・岐阜県中津川市）に建設されました。

大正3年に名古屋電燈の社長に就任した桃介は、社内に臨時建設部を設置し、八百津発電所よりも上流側における木曽川の電源開発を行うため、既に水利権を獲得済みの地点での計画変更や新たな水利権の出願などに着手します。しかし、木曽川開発を実行に移すにあたって解決するべき問題として、木曽川の水運に対する補償問題が浮上しました。もともと木曽川は、上流域に広がる木曽御料林の木材輸送に活用されていました。しかし、電源開発によって川の流れが堰き止められ、木材輸送が不可能となってしまうため、御料林を管理していた帝室林野管理局との交渉が必要でした。この問題は、最終的に〝木材運搬のための森林鉄道を会社側の負担で建設する〟という条件を名古屋電燈が受け入れたことで解決します。

木曽川開発の見込みが立つと、電気製鉄部門と電源開発部門を合わせて独立させ、大正7年9月に木曽電気製鉄（翌年10月、木曽電気興業に社名変更）を設立。電源開発は新会社へと引き継がれました。

第一次世界大戦の影響で、物価の高騰や労力の不足、輸入した機材を乗せた船が消息不明になるなど様々な困難に見舞われながらも、着工から約2年後の大正8年7月に一部が完成し、出力4200キロワットでの送電を開始します。続いて11月に水車発電機3台すべてが竣工し、総出力1万2600キロワットの発電所となりました。

賤母発電所から徒歩5分ほどのところに、かつて「對鶴橋」という吊り橋が架けられていました（老朽化の為、平成30年に解体）。この吊り橋は賤母発電所の建築資材を運搬するために木曽電気興業によって架橋されました。賤母発電所以降の発電所建設の際にも資材運搬用の橋が架けられ、それぞれの橋には発電所建設に関わりのある人物にちなんだ名前が付けられています。

對鶴橋の名は、当時の帝室林野管理局の長官であった南部光臣の家紋「対鶴」から名づけられました。

賤母発電所

発電機室

對鶴橋

from Archive 書庫棟から

15年の歩み

お陰さまで文化のみち二葉館が開館して15年経ち、二葉館の2階に設けられた〝郷土ゆかりの文学資料室〟も同じ歳月を重ねました。

皆さんご存知の坪内逍遙二葉亭四迷など、名古屋にゆかりがある作家は数多くいます。しかしながら、名古屋市内に近現代の文学館と呼べる施設はなく、二葉館は市内で唯一の文学資料室といえます。

開館当初より、作家の城山三郎や歌人の春日井建ほか、郷土の作家やそのご家族、研究者らのご厚意によって、貴重な書籍や資料の寄贈を受け入れてきました。寄贈品は年々と増えて、現在では約5万4千点の資料を収蔵するに至り、寄贈者は40名以上にのぼります。

寄贈品のなかには高価な美術品や、図書館では見られない希少な本などもあり、持ち主の嗜好や個性がうかがえます。

来館者の皆様に郷土文学について知っていただくため、それらの寄贈品をもとに、開館以来ずっと企画展や文学イベントを年に数回催してきました。企画展では、外部から一部資料をお借りすることもありますが、テーマによっては、当館が所蔵するものだけで展示することもあります。

次回の企画展「開館15周年 郷土ゆかりの文学資料収蔵展」では、これまでに寄贈された収蔵品のなかから、選りすぐりの資料とともに郷土ゆかりの作家についてご紹介します。また、15年間の文学活動に関する歩みについても振り返りますので、是非ご覧ください。

これからも、郷土ゆかりの文学に関わる大切な資料を収集してより充実した施設を目指しながら〝文学〟を通じて拡がる人との出会いや繋がりを大切にしていきたいと思います。

城山三郎 書斎復元（2階展示室6）

収蔵庫でもある蔵（非公開）

新規寄贈品